

今、なぜ二宮尊徳か —四つの貧困化、その克服を報徳思想で—

縁あって、鹿児島大学「稲盛アカデミー」で『二宮尊徳に学ぶ』を講じている。稲盛アカデミーは、稲盛和夫さんの寄附によるものである。

まず、二宮尊徳をほとんど知らない学生たちにどう語って聞かせるか。テキストに『二宮翁夜話』を選び輪読方式ではじめた。あわせて「今、なぜ二宮尊徳か」を、次の「四つの貧困化」を提起して語ることにした。

- ①わが国の財政が極度に貧困化したこと
- ②人口減少で成長路線が貧困化すること
- ③環境が破壊され資源が貧困化すること
- ④自立と共助する精神が貧困化したこと

さて、これをどう克服していくか。

よく「歴史に学べ」といわれるが、その視野に、幕末の低成長期に活躍した人、二宮尊徳翁の「報徳思想」とその業績が浮かんでくる。

翁の時代が、現代に酷似していることは、今更語るまでもない。徳川時代前期の繁栄が頂点に達したあと、民百姓は苛酷な徴税と度重なる災害で飢餓と貧困に苦しんだ。各藩の財政は破綻して、商家の富豪から借金する有様。薩摩藩などは、貸主の豪商に250年賦の返済を提示したという。

二宮翁の生涯の闘いは「貧困の克服」であった。それは金銭的貧しさの克服と、荒廃した田畑、山林、道路、河川の復興であるが、その前提に翁が強調したのは人々の「心田の開発」であった。(二宮翁夜話六三)

「我が道は、人々の心の荒蕪を開くを本意とす、心の荒蕪一人開く時は、土地の荒蕪は何万町歩あるも憂ふるにたらざるが故なり」とある。

四つの貧困化も、人々の「心田の荒蕪」に起因する。市場至上主義に躍らされて「欲望」のみが肥大し、公に頼って「分度」を忘れたのである。

二宮翁の時代の「貧しさ」とは、時代の背景が異なるので、貧困の様相も違う。だが、翁の「報徳思想」に照らして見れば、四つの貧困化の克服に、次のような処方箋が描けるのではないか。

- ①「尊徳仕法」に基づく財政破綻の建て直し
- ②「分度」を弁える低経済成長下での生き方
- ③「一円観」に基づく環境破壊の回復と保全
- ④「自助と推譲」による住みよい社会の建設

これらを逐一述べる紙幅はないが、翁のいう「心田の開発」に関連していえば、改めて人間の「幸せ」とは何か。それを吟味すべきだと思う。

「足るを知る者は富む」(老子)というが、欲望に限度を設けない限り、足るを知る「幸せ感」を得ることはできない。二宮翁は「分度」を発明された。個人も企業も、また国家も分度がなければ立ち行かない。環境破壊の修復と保全も、負荷の分度を弁えて取り組まねば、出来がたいのである。

報徳の教えは、通常「至誠、勤勉、分度、推譲の4綱領」といわれる。

わが身の暮らしをよくするために、「至誠」をもって「勤勉」に働き、暮らしに「分度」を立てる。儉約を心がけて暮らした余りを「推譲」する。後日や来年のため、また災害に備えて蓄えるのを「自譲」といい、それに止まらず、周りの人々に、そして村落に、さらに国に推譲するのを「他譲」という。他譲の帰するところは自分なので、翁は「わがため人ため」といった。

二宮四郎さん(翁の曾孫)は、推譲を次のように述べる。

「この世には生きる方法が二つあります。一つは『譲る』であり、もう一つは『奪う』です。天道すなわち自然の世界では、譲るという方法はありません。他から奪う方法でしか生きられないのです。人は社会というものを作らないと生活できません。その社会を作る基礎が譲道なのです」と。

夜話には「天道は自然、人道は作為」として、「人の身であれば、欲があるのは天理で、田畑に草が生じるのと同じことだ。そこで人道は私欲を制するのを道とし、田畑の草をとるのを道とする。…中略…天理は万古変らないが、人道は、一日怠ればたちまちすたれる」とある。(夜話五二)

学生たちに「天道は自然、人道は作為」を説くうちに、思いは半生をきた「作為の農協運動」に及ぶ。そして、翁を敬慕する農協人として、「貧困化の克服を報徳思想で」と思うことしきりである。

**(鹿児島大学稲盛アカデミー講師・元鹿児島県信用農業協同組合連合会常務理事
八幡正則・はちまんまさのり)**